

学校カウンセリング・教育相談に対する大学生のイメージ調査 —教職課程における指導の留意点の導出を目的として—

佐藤 誠子*

An Investigation of University Students' Image of Educational Counseling at Schools: For the Purpose of Deriving Points of Instruction in Teacher-Training Courses

Seiko SATO*

Department of Human Education, Faculty of Human Studies

Abstract

This article investigates university students' image of educational counseling at schools in order to derive points of instruction in teacher-training courses. Fifty university students answered to the questionnaire about educational counseling. The results showed that they had naive image of educational counseling: it was separated from lessons in schools, far away from everyday life, and relatively negative. It suggests the necessary of changing their image from the pathology oriented treatment model into the developmental model in teacher-training courses.

1. はじめに

今日、教育現場が抱える問題は、教科の学習のみならず児童・生徒の問題行動や心のケアの必要性など多様化している。その中で、教師はこれらの問題に対処しつつ、学校を子どもが過ごしやすい場にすることが求められる。そのための援助サービスの一つとして、学校におけるカウンセリング、教育相談がある。ただしそれは、臨床場面におけるカウンセリングの理論をそのまま学校場面に敷衍してなされるものではない。それは、学校教育の持つ特質から考えると、学校においてなされるカウンセリングは臨床場面におけるそれとは異なる側面を持つものだからである。しかし、学校のカウンセリングや教育相談に対する一般的なイメージは、臨床場面におけるカウンセリングの域を超えるものではないことが予想される。もし、大学生（とくに教員志望学生）にとってそうした素朴なイメージが先行しているとすれば、教職科目の講義においてそのイメージの転換が迫られねばならない。このような問題意識から、本研究では、特に大学生のもつ学校カウンセリングお

よび教育相談に対する意識調査を行い、その結果から教職課程での教育相談に関する科目の指導における留意点を導出することを目的とする。

2. 学校におけるカウンセリング・教育相談のもつ特質

まず、学校におけるカウンセリング・教育相談のもつ特質について簡単にまとめておく。近藤(1994)⁽¹⁾を参考にすると、それは主に下記の4点においていわゆる臨床場面における「カウンセリング」とは異なる側面をもつことが示されている。

①援助介入の対象について 援助介入の対象、つまり、「治療者」(の役割をする者)がはたらきかける対象は、フロイトの精神分析にはじまる伝統的な心理療法の場合、問題を抱える本人のみであった。これはいわゆる病理モデルと呼ばれるものであり、問題のありかを個人の内的側面に向け、その問題点を取り除くことを目的としている。しかし、学校カウンセリングの場合、それは問題を抱える本人だけではなく、本人に関係する他者、そして本人が所属する社会にまで及ぶ。問

*石巻専修大学人間学部人間教育学科

題の解決にあたり、問題を抱えた本人の友人・家族、教室や学校全体の文脈を考慮することが求められるのが学校におけるカウンセリングの特質である。

②援助介入の担い手 いわゆるカウンセラー、セラピストなど専門的知識を持ち訓練を積んでいる者（専門家）が治療にあたるのが、一般的なカウンセリングである。しかし、学校カウンセリングでの援助の担い手は、そのような専門家だけでなく、教師や保護者、あるいは同じ問題を抱える人どうしの自助グループなど多岐にわたる。

③援助介入の場所 問題を抱えた本人がクリニックなど特別な場所に赴き、そこで専門的治療を受けるのが伝統的な心理療法である。しかし、学校カウンセリングにおける援助介入は、そのような本人の日常生活とは離れた空間ではなく、問題を抱える本人のいる場において行われる。つまり、本人が所属する学校という社会の中で介入が行われる。

④援助介入の時期 ここが最も重要な点であるが、問題を抱えた本人が、問題が起きてから（問題に気づいた後に）専門家のところを訪れ治療が始まるのが伝統的な心理療法であるが、一方、学校カウンセリングでは、そのように問題が発生した後だけではなく、問題が起こるのを未然に防ぐ「予防的援助」も求められる。学校全体に対する援助としては予防的な心理教育が重視される。このことから、援助の担い手は、相談者の要請があって初めて動くという受動的な対処ではなく、問題が起こる前に予防するという積極的な介入が必要とされる。

以上をまとめると、学校におけるカウンセリング・教育相談では、問題への対処は学校内の人間同士の関係性の中で行われること、援助の担い手は外部の心理の専門家だけでなく内部にいる身近な教師も関わること、授業内外問わず学校生活の文脈全体を通して行われること、そして、問題予防型の援助が重視され問題を抱えた児童・生徒の援助要請を待つのではなく、積極的な援助や心理教育が求められることにその特徴があるといえる。

したがって、学校におけるカウンセリングや教育相談においては、教師が援助の主体となり（専門家だけではない）、学校という空間の中で（特

別な場所ではない）、すべての児童・生徒に対して（問題を抱えた特定の児童・生徒だけではない）、予防的援助（問題発生後の対処だけではない）を行うことが求められているといえる。このことについて、阿部・佐藤（2012）⁽²⁾では、学校教育全体を通じた援助として、とくに授業におけるカウンセリングの重要性について指摘している。阿部・佐藤は、問題が起こるのを未然に防ぐ「問題予防型」の援助は、いわば石隈（1999）⁽³⁾のいう「一次的援助サービス」にあたり、それはすべての児童・生徒を対象とした援助であること、そしてそれは特別な対象や場所でのみ行われるのではなく学校生活全体を通してなされるものであることを指摘している。そして学校生活の大部分の時間が「授業」にあてられていることから、カウンセリング的援助は授業という場において特に重視されなければならない、その中で教師と児童生徒の間の信頼と共感の関係性を高める必要があることを示している。加えて、文部科学省「教育相談等に関する調査研究協力者会議」報告書（平成21年3月）⁽⁴⁾では、スクールカウンセラーの活動について各資格認定協会（日本教育カウンセラー協会、学会連合資格学校心理士資格運営機構、日本心理学会、日本産業カウンセラー協会）から聴取した意見が掲載されており、その中でも、上記の問題点を指摘したものがみられる。たとえば、「スクールカウンセラーの配置が「治すカウンセリング」を主体としているようである」「小学校では、発達段階から見て個別指導は機能しにくいという面もある。子どもたちの社会性を育てる、学級指導など教室の中で行う予防・開発的カウンセリングも必要なのではないか」「学校のニーズに応じたスクールカウンセラーを任用し、スクールカウンセラーの活動を心理教育的援助（学校教育）の一環として位置付け、地域の専門機関との連携の下に行うことが重要ではないか」などの意見がそうである。これらの意見はとくに、援助の対象と時期に関わる点を指摘している。

3. 本研究の目的

以上より、学校におけるカウンセリング・教育相談は、いわゆる臨床場面における心理療法とは異なる性格をもつものであることが見てとれる

が、では、初等・中等教育を経た大学生の抱く学校で行われる教育相談に対するイメージは、上記とどの程度一致しているのだろうか。大学生が素朴に抱くイメージと、実際に求められる学校における教育相談の役割との間にズレが存在する場合、教職科目の講義においてはそれを修正することが求められる。そこで本研究では、いわゆる「学校カウンセリング」「教育相談」に対する大学生の素朴な考え方やイメージを明らかにし、その上で教職科目においてそれらの概念に対する理解をどのようにして深めるか、指導における留意点を導出することをねらいとする。その際、阿部・佐藤（2012）⁽²⁾の指摘を踏まえ、とくに学校におけるカウンセリング的援助と、学校で過ごす大半の時間を占める授業とのかかわりについても焦点をあてる。

4. 調査の概要

4.1 方法

私立大学生 50 名が調査対象者となった。実施時期は 2012 年 11 月上旬である。教職科目「カウンセリングの理論と実際」の講義内で質問紙に回答してもらった。調査実施段階では、対象者は学校カウンセリングの事項については未学習であった。実施にあたり、個人のプライバシー保護のため回答は無記名とし、途中で回答をやめても構わない旨を教示した。

4.2 質問項目

質問項目は全部で 12 項目である（Table1）。このうち 7 項目（Q1、Q2、Q4、Q6、Q8、Q10、Q11）を、上述した学校におけるカウンセリ

ング・教育相談のもつ特質にかかわる項目として設定した。そのほか、カウンセリングの「価値」について問う項目（Q3、Q7、Q12 の 3 項目）、およびカウンセリングに対する「ポジティブ・ネガティブイメージ」を問う項目（Q5、Q9 の 2 項目）もあわせて設定した。調査では、「学校（中学校、高校）で行われるカウンセリング・教育相談に対してあなたが持つイメージについてお聞きます。次の各項目について自分自身はどう思うか、あてはまるところに数字に○をつけてください」との教示のもと、そう思う（4）～そう思わない（1）の 4 件法でたずねた。また、これらの質問項目への回答後に、「学校（中学校、高校）で行われるカウンセリング・教育相談」から連想するものを自由に記述してもらった。

5. 調査の結果と考察

回答不備の 1 名を除く 49 名が分析対象となった。各質問項目について、「そう思う」「ややそう思う」と回答した者の比率を算出した（Figure 1、Figure2）。これらの結果をもとに、カウンセリングおよび教育相談に関する大学生の意識について考察する。

5.1 授業との連携に関する意識について

まず、学校におけるカウンセリングや教育相談と「授業」との連携に関する意識についての結果をみると（Figure1：Q1、Q8、Q10、Q11）、概して、それらは授業とは別個にあり切り離されていると考える者が多いことがうかがえた。ただし、Q1（「学校の授業とは切り離されている」）よりも、Q8（「教科学習（国語、数学などの学習）と

Table 1 質問項目

Q1	学校の授業とは切り離されている。
Q2	自分にとって身近なものである。
Q3	カウンセリングを受けることで、心の問題は解決される。
Q4	普段の日常生活とは離れた場所で行われる。
Q5	暗いイメージがある。
Q6	自分の知らない人に話をする。
Q7	カウンセリングは受ける価値がある。
Q8	教科学習（国語、数学などの学習）とは切り離して考えなければならない。
Q9	明るいイメージがある。
Q10	学校の授業と連携して行われる。
Q11	課外活動（授業時間外の時間）でのみ行われる。
Q12	カウンセリングを受けても、根本的な解決につながらない。

学校カウンセリング・教育相談に対する大学生のイメージ調査

は切り離して考えなければならない」の方が、「そう思う」「ややそう思う」と答えた者が相対的に少なく、その割合は6割弱にとどまっている。対象者がこれまで経験してきた学校におけるカウンセリングは授業とは分離されたイメージである一方、それがカウンセリングのあるべき姿とは必ずしも捉えられていないことが浮き彫りになった。

5.2 実施場所、相談相手に関する意識および親近性について

実施場所についての意識（Q4）に関しては（Figure1）、半数を超える者が「日常生活から離れた場所で」行われるとのイメージを抱いていることがうかがえた。それは、学校における相談窓口が、カウンセラー室や保健室などの普段は頻繁には足を運ばない所に設置されているという自身の経験がもとになっているものと思われる。また、相談相手についての意識（Q6）、親近性（Q2）の結果に関してみると（Figure1）、学校に

におけるカウンセリングは学生にとって身近な存在ではないということがうかがえる。以上の結果を概観すると、学校カウンセリングや教育相談に対する大学生のイメージは、臨床場面における心理療法の特徴の域を超えるものではないといえよう。

5.3 価値およびポジティブ・ネガティブイメージについて

結果を Figure2 に示す。これを見ると、カウンセリングを受けることによる問題解決を期待しているわけではないが（Q3, Q12）、カウンセリングに対しては価値を認めている（Q7）ことがうかがえる。学校におけるカウンセリングに対する学生の期待は、必ずしも問題解決だけに向けられているわけではないようである。また、ポジティブ・ネガティブイメージについては、やや相対的に暗いイメージが抱かれやすいことがうかがえる（Q5, Q9）。これは、上記で示した項目に対する回答の傾向からうかがい知ることができる。

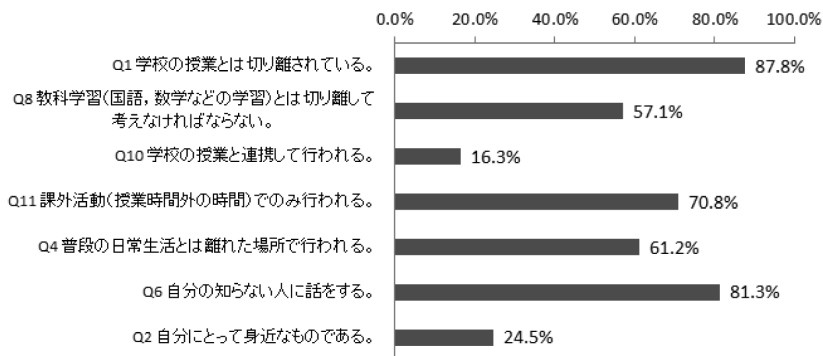


Figure1 学校（中学校・高校）におけるカウンセリング・教育相談の特質に関するイメージ（「そう思う」「ややそう思う」と答えた割合）

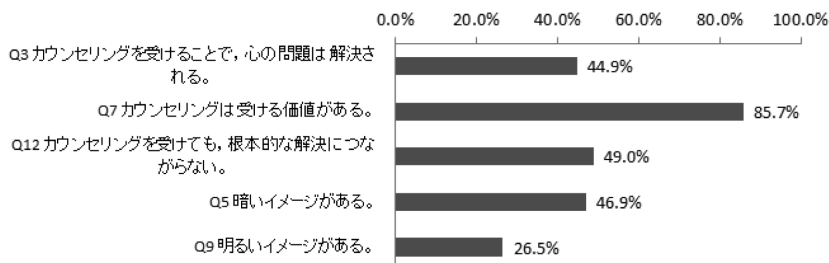


Figure2 学校（中学校・高校）におけるカウンセリング・教育相談の価値およびポジティブ・ネガティブイメージ（「そう思う」「ややそう思う」と答えた割合）

すなわちそれは、学校の授業とは切り離され、身近ではない所で行われ、知らない人に対して悩みを打ち明けるというものである。このような「治療モデル」のカウンセリングイメージが、学校における教育相談へのネガティブなイメージを生み出している可能性がある。

5.4 自由記述の結果

では、対象者となった大学生は学校カウンセリングに対して具体的にどのようなイメージを連想していたのか。自由記述の結果を Table2 に示す。自由記述について、内容別に、実施の効果に関するもの、感情的な印象に関するもの、その他に分類した。その上で、大学生が抱えている具体的なイメージを捉えていくこととする。

まず、実施の効果に関して記述された内容をみ

ると、いわゆる一般的なカウンセリングのもつ特徴を捉えているものがみられた。すなわち、カウンセリングを受けて問題を解決できるかどうかは本人によるというものである（4件）。これは、本人の意思がなければ問題の解決に至らないというカウンセリングにおける本質を指摘している。「(カウンセリングを) 受けたことがあるが、あまり効果はなかった。おそらく、こちらが協力的でなかったせいもあると思う」との記述もその特徴を示す例である。他方、学校のカウンセリングに積極的な効果を期待する記述（「心の中が救われる。気分が晴れる」「問題を解決する場」など7件）もみられた。一人では解決できない心の問題に対処するための手段として捉えられているようである。

このような、カウンセリングのもつ特質の把握

Table2 学校におけるカウンセリング・教育相談という言葉から連想するもの（記述例）

【実施の効果に関するもの】（19件）	
積極的效果 (7件)	- 心の中が救われる。気分が晴れる。 - 中学生や高校生はとてすぐ悩んでしまうイメージがあり、その悩みなどをカウンセリング・教育相談で話すことによって心のゆとりができると思った。
一般的説明 (5件)	- 学校生活を送っていく中で自分ではどうすることもできないような悩みや心情を抱えてしまったときなど、自分の身近な人に相談しにいくような事柄を相談する所。 - 不安や悩みを聞いてもらい、それについてのアドバイスなどをしてくれる。
解決は当人次第 (4件)	- いじめや恋愛、他人との関わり方などの悩みを相談したり話を聞いてもらう。どうしたらいいかわからない時に、助言をもらう。第三者からの客観的な意見を聞ける。それからどうするかは本人次第なので、解決できるかどうかは本人による。 - 学生生活に人間関係や学力でうまく適応できなかった場合や家庭問題に悩む人が最後にたよる所。相談者の心に呼びかけて、自力で解決する方法を見つける手助けをする。
解決には至らない (3件)	中学校でのカウンセリングは、少し暗いイメージがあった。受けたことがあるが、あまり効果はなかった。おそらく、こちらが協力的でなかったせいもあると思う。
【感情的な印象に関するもの】（15件）	
心理・物理的 距離 (9件)	- 自分自身で解決できなかったり、友人や親等に相談しても解決できない場合、行きつまった場合に相談する場だと思う。簡単に相談しに行く場所ではない気がする。 - どこことなく近寄りにくいイメージ - 行きにくい場所
暗さ (6件)	- 静かであまり明るくはない部屋 - 暗い教室 - 堅苦しい - 重苦しい
【その他】（33件）	
相談内容 (10件)	- 進路相談 - 不登校、いじめ、問題、ひきこもり、病気
話を聞く所 (7件)	- 一つの机でカウンセリングの人と生徒が面と向かい一対一で話をする。 - カウンセラーにひたすら話を聞いてもらう - 人の話を聞く。(先生じゃない人と)
状況 (3件)	いわゆる相談室のような所で行われる。
担当者 (3件)	先生は、毎日ではなく、時々学校に来る。放課後、予約
その他 (10件)	- 悩みがない人にとっては無縁 - 気をつかう。

やその効果への期待がみられる一方で、学校におけるカウンセリングに対してはネガティブなイメージが抱かれていることもうかがえた。それは感情的な印象に関する記述の中で、たとえば「暗い」「堅苦しい」「重苦しい」などという雰囲気（6件）や、「悩みがあっても積極的に自分から参加することが、はばかれる場」「簡単に相談しに行く場所ではない気がする」など心理的距離の遠さを指摘するもの（9件）がみられた。これらの結果から、大学生にとっての学校におけるカウンセリングや教育相談は、学校生活全体を通した児童・生徒全員に対する予防型援助というよりも、問題が生じたあとに問題を抱えた特定の者を対象に行われる解決型援助であるということがうかがえる。

6. まとめ：指導における留意点

臨床場面における伝統的な心理療法と学校におけるカウンセリングや教育相談には、先述したような違いはあるが、クライアント／児童・生徒と、カウンセラー／教師の間に信頼と共感の関係を構築し、それを基盤として最終的に問題の解決や人格的成長が目指される点では両者は同じである。ただし、学校教育では、児童・生徒と教師との間の信頼関係は、学校生活全体を通して形成されることに留意しなくてはならない。その中でも、とくに学校生活の時間の大半を占める授業が重要になる（阿部・佐藤，2012）⁽²⁾。

ところが、本調査結果から示されたことは、大学生は学校カウンセリングや教育相談に対して、学校生活全体を通した援助ではなく、学校の文脈とは離れた場所で行われるもの、授業とは切り離されたものというイメージが強いということであ

る。これは、石隈（1999）⁽³⁾のいう学校カウンセリングの一次的援助サービスではなく、問題を抱え始めた、もしくは問題を起こした児童生徒に対する二次的／三次的援助サービスの範囲にとどまっているものである。こうした学生の認識の現状を踏まえ、教職課程における指導の際には、とくに次の3点について認識の変容をうながす必要があるといえる。

- ①実施場所：日常生活から切り離された特定の場所→授業を含む、学校生活の場全体
- ②時期：問題が起こった後（問題解決型援助）→問題が起こる前（予防型援助）も含む
- ③対象：問題を抱えた特定の児童・生徒→すべての児童・生徒

以上の結果を踏まえ、「学校」という特質を踏まえたカウンセリングに関する理解を深めさせるとともに、大学生のもつ素朴なイメージと概念の変容を目指さなければならないだろう。

文献

- (1) 近藤邦夫（1994）教師と子どもの関係づくり—学校の臨床心理学— 東京大学出版会
- (2) 阿部康一・佐藤誠子（2012）授業における教育カウンセリング—教育相談の基盤となる教師と子どもの関係性の構築に向けて— 石巻専修大学経営学研究, 23, 69-76.
- (3) 石隈利紀（1999）学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス— 誠信書房
- (4) 文部科学省（2009）児童生徒の教育相談の充実について—生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり— 教育相談等に関する調査研究協力者会議報告書